

OECD/NEA の計算機などの環境

経済協力開発機構 (OECD)

原子力機関 (NEA)

原子力科学課

須山 賢也

suyama@nea.fr

原稿執筆をお願いされた時には、どこかにドライブに行ったことでも書こうかと、これまでに撮ったデジカメの写真を見ていました。しかし、まとまった話になりそうもないので、おそらく毎日 PC の画面とにらめっこをしている皆さんの好きそうな話にすることとしました。私自身、管理者のまねごとのような事を原研時代にはやっておりましたし、そういった点からも感じた事などを書いてみようかと思います。

ハードウェア

NEA のネットワークを含めた計算機環境は、原研に比較をするとユーザー数も少ない (70 - 80 名) ことがあって、管理者がかなりしっかりと目を光らせているという印象です。また一般ユーザーもデータバンクの一部をのぞけば非常に静かで、与えられたものを寡黙に使っております。

原研の場合にはどうでしょうか。歴史的経緯もあるかもしれませんが、基本的に研究室毎に計算機の購入・管理を行っているために、IP address の交付は受けるとしても、最終的な判断というか管理上の事項の決定に関してはマシンを管理している部局の自由裁量の余地が残されていると思うのですが、ここではそのような勝手な真似はできません。個人の PC は接続することは許されておりませんし、マシンは Intel ベースの PC で統一され、OS も Windows NT (!) 英語版で統一されています。キーボードだけは、英語あるいはフランス語のキーボードの 2 種類があります。唯一 Mac があるのは出版担当の課のみです。

普通の NEA のスタッフが使用している PC の多くは Dell OptiPlex シリーズです。私が赴任してから 5 月現在まであてがわれているマシンはそれのもう 4、5 年近く前のモデルで Pentium II 450 MHz、メモリ 128 M のマシンです。最初はストレスを感じつつ使っていましたが、慣れてくると平気になってきます。他のスタッフも同じような環境で仕事をしているので、気にならないだけかもしれません。もちろん、「壊れるまで使え」というわけではないようです。OA 管理者は PC 交換のリストを持っており、古いものから順に入れ替えをしていっています。最近の新しいマシンは NEC 製で、

DVD-ROM と CD-RW を載せたタワー型です。OS は Windows2000 ですから、やはり安定性をねらっているようです。

ちなみに、プリンタは PostScript プリンターが標準です。PS 信奉者としては最初に見た時にうれしく思ったものです。出版を行う部局で PS プリンタを必要としているようで、それにあわせた選択と理解をしています。

OA 用ソフトウェア

原研に比べると、ハードウェア環境の入れ替えスピードの遅さというのは明らかだと思います。原研は研究所ということもあって、個人の考えで入れ替えをする研究室が多いのではないのでしょうか。この差は、やはり、NEA が OECD という組織の一部であって、OECD 全体としての OA 環境構築の考えの下で作業を行っているからに他なりませんし、安定して動作をするという事が大前提で、すぐに新しい環境には飛びつかないという考えもあるようです。では、ソフトウェアはどうでしょうか。

OECD の OA 環境は Microsoft の MS-Office を使用して構築されています。しかも、Office 97、すなわち MS-Word 97 等々が標準で、出版用の原稿も、それで最後まで編集をしています。それ以外の製品ラインは見た事がありません。他の製品で見ると言えば、PDF file 作成の acrobat と Netscape communicator ぐらいです。ここで問題になるのが我々日本人の日本語の読み書きをしたいという要望です。こちらに赴任した時には、自前のラップトップを持ち込んで、これをつないでやればいいやと安易に考えていたのですが、「個人の PC はセキュリティの問題があるから接続してはだめ。それに日本語のエラーメッセージは分からない」という事であえなく却下されました。

しかしながら、与えられた PC にまったく個人で好きなソフトを install してはいけないかと言うと、そうでもありません。必要なソフトウェアは自分で install をする事は可能です。たとえば、私はメールの読み書きに長年使用してきた Becky! をこちらでも使用しています。この Becky! など、他にユーザーがいないソフトでも、特殊事情を察してか、個人の責任で使用するのを黙認しています。

日本語環境

OECD の標準システムでは日本語環境がまったく考慮されておりません。ここでの公用語が英語とフランス語という事はわかっている、日本との連絡には日本語が不可欠です。そこで、歴代の日本からの OECD 赴任者の方々は、英語環境に日本語を取り扱うシステムをいかに取り入れるかについて多大な努力を払われてきたようです。

現在私が使用しているのは、unionway という会社が出している Asiansute という製品で、前任者の桜井さんが導入されたものです。これのおかげで、愛用のメーカーである Becky! 上で日本語が読み書きできます。また、ブラウザーで日本のサイトもなんとかチェックできます。問題は日本の仮名漢字変換プログラムに比べるとかなり原始的な

ことです。連文節変換はできません。辞書も小さいようです。ですから、少し長いメールを書くと本当にヘトヘトになります。また、フォントが少し変です。

日本との連絡に不可欠な電子メールではどうでしょうか。OECD の標準メールシステムはあの Outlook ですが、Microsoft が無料で配布をしている Global IME を使えば日本語が入力できます。しかし元々英語版の Outlook にまともに日本語の文字コードを扱えという方に問題があるのか、文字化けをする事が多いのです。よって、私は使用しておりません。

ネットワーク

NEA の web server である www.nea.fr を訪れた方は多いと思います。実は、NEA の計算機環境の多くは、データバンクのスタッフが面倒を見ており(OA 関連は別部隊)彼らがネットワークおよびお多くのサーバ類の整備・管理を行っております。

つまり、NEA のネットワークはもちろん OECD のネットワークの一部ではありますが、独自の web server とドメイン名を有しています。よってスタッフ全員が OECD の標準メールアドレスである 名前.苗字@oecd.org という形式 OECD 標準の Outlook 向けのアドレスを持つ一方で、NEA の mail server 用のメールアドレスも取得できます。私の suyama@nea.fr というアドレスがそれに当たります(こちらの人は Netscape mail と呼んでいます)。これは、普通の電子メールで、sendmail でメールを配送し、やってきたメールは POP で受け取るというものです。上に書いた、Outlook での文字コード処理に問題がありますので、私はもっぱら suyama@nea.fr の方を利用しております。NEA で独自のサーバーを有していることもあり、メーリングリストの作成も頼めばやってくれますし、必要に応じて柔軟な運用を行っている印象です。

NEA のサーバー類ですが、以前 VAX があったためか DEC (Compaq) を主体としたマシンがメインとなっております。外部でのコード開発環境を考えれば Alpha を載せたマシンに Tru64 UNIX も悪くはないと思うのですが、現在流行の、Linux を載せた PC クラスタに多くのシステムの移行をはかっております。また、Gigabit Ethernet のセグメントに Network Attached Storage をつけたファイルサーバーも最近導入されました。

また、NEA のネットワーク資源は OECD 本部からもそのまま使用できます。会議に必要なファイルのあるドライブにコピーしておけば、OECD 本部から NEA の Windows ドメインにログインして、その自分のファイルを本部からも参照できるわけです。これは便利で、非常に重宝します。「そんなの当たり前」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、原研時代に、シグマ委員会の会合で使用するファイルが本部で参照できればいいのにと感じていたものですから、、、。ですから、ネットワークとそれを支えるサーバー群に関しては、時代の趨勢にあわせた環境、機材が導入されていると言えます。

ここまで書くと「なんてすばらしいのだ」と思われるでしょうが、実際には、数値計算向けの環境整備は力が入っていません。いくつかあるユーザー向けのマシン毎に各ユーザーのホームディレクトリはバラバラですし、Sun や IBM といった他メーカーのマシンへのサポートは力が入っておりません。使っている人はかなり面倒を感じているのではないかと思います。言うなれば、行き当たりばったりで、「このマシンのディスクが足りないなら、あっちのディスクをマウントしてしまえ」とばかりにやっている模様です。すいません。悪く言うつもりはありません。が、マシンの稼働には一生懸命でも、環境整備はさらなる努力が必要だと感じています。

終わりに

ここまで書いてきたように、OECD のネットワークは全般的によく管理され、特殊な事はせず、機能が確立されているシステムやソフトウェアをよく選択して運用していると感じます。OECD のスタッフの任期は、通常は 2-3 年ですし、もっと短い人になりますと、3 ヶ月から半年で交代が起こります。そういった人達、特に PC を趣味とせず単に作業用の道具として利用する人もすぐに必要な業務を遂行できるのは、MS-Office というほとんど標準的に使用され、誰でも使用経験があると言えるパッケージを採用し、その上できちんとしたサポートがあるからなのだと思います。提出が必要な文書はすべてイントラネットから取得できますし、提出文書の書き方等の説明も英仏両方の言葉で書いてあります。ユーザーのサポートもユーザー側に立って、できるだけ要望を聞いてくれ、私自身、日本語環境以外には特に不満はありません。

未だに、Office97 を使っているというのは日本でのソフトウェアアップデートのサイクルの短さを考えると最初はびっくりしましたが、管理をするという観点からすると、確かに頷けることです。出版を担当する課で Word97 を使って最終的に 300 ページを超えるレポートの編集をしているのですから、普段は高々数ページの文書を作成する一般ユーザには今以上に高機能な新しい環境を積極的に与える必要性はないということなのでしょう。その点、これまで何でも新しい方が良いと考えていた私も少し思い直した次第なのです。こちらの管理者の一人と話しをしたところ、「(現在計画中の)OECD 本部地区の事務局機能の多くをパリ郊外のラ・デファンスへ移転する時に、Windows XP を中心とした新しいシステムに移行するかも」という事を言っておりました。その時に混乱なく移行できるかどうか、楽しみにしています。

結局、なにかまとまりの無い文章になってしまいましたが、こちらの環境の雰囲気が伝わればと思います。もし、次に寄稿をする機会があれば、今度こそ、デジカメ写真を中心とした生活の話などにしたいと思います。